

落語家・立川寸志さんを知る5つの“小噺” ～落語の魅力と立川市への思い～

落語家になってから
故郷のありがたみを感じます

其の一 落語にはまったきっかけ

落語を知ったのは、小学校低学年のころに読んだ落語の絵本でした。中学生のときに、テレビに出ていた落語家を見て、落語に夢中になって、立川から新宿の末広亭や池袋演芸場に冒険気分で出掛けようになりました。当時はお客さんもまばらな客席で、マイナーだけど面白い世界を自分だけが知っている喜びを感じていました。そのころ好きだったのは三遊亭圓丈師匠で、現代を舞台にした新作落語から入り、古典落語の面白さにもはまっていきました。

今年秋に真打昇進を予定している立川市生まれ立川市育ちの落語家・立川寸志さん。44歳だった2011年に師匠・立川談四樓さんに入門し、“遅れてきた落語少年”として注目を集めています。立川市出身落語家初の真打内定までの経緯や、今後の願望について話を聞きました。

図広報プロモーション課シティブロモーション推進係・内線2657



其の二 40代から始めた落語の道

落語界に入るとまず、師匠の世話をはじめ、寄席や落語会の進行など、たくさんの雑用をこなさなくてはならない「前座修業」の期間があります。その仕事と並行して、落語の稽古をしたり、太鼓や踊りの練習をしたりする。理不尽に感じることや落語界独特のルールなどもあり、それまで社会人として働いてきた経験が全くと言っていいほど役に立たなかったことも大変に感じました。ただ、転職も何度かしていたし、自分が好きなものの世界に自分から飛び込んだので、少しづついい感じともやめようとは思わなかったですね。

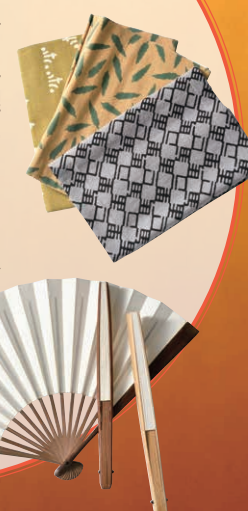
其の三 寸志さんにとっての落語の魅力

立川流家元である故・立川談志師匠は、『落語は、人間の業(ごう)の肯定である』という言葉を残しています。たとえば、どんなに立派なことを言っている、おなかのすいたら他人の食べているものをちょっともらっちゃうとか。人間ってそういうところがあるよね、と。人間は弱い生き物で、それがいいとか悪いとかではなく、そういうものとして受け入れる。あなたもそうだし、私もそう。そういう人間のダメなところを笑い合ったり共感するところに、落語の面白さがあると思っています。

寸志さんのお仕事道具を紹介

色違いの扇子と手ぬぐい

落語の小道具として欠かせない扇子と手拭い。寸志さんは、高座に上がる日は常に3種類以上を持ち歩くといっています。その理由を伺うと、たとえば二席務める落語会の場合、二席目に着物を着替えることも多く、その着物の色との兼ね合いで使い分けているとのこと。寸志さんが舞台上で使う小道具にも注目です。



其の四 故郷である立川への思い

私が子どものころはまだ米軍の基地があって、高い網の塀にしがみついても中を見ると、群青色のバスが走っていて。どこか街に戦争の影が残っていました。今や本当に綺麗で便利な都市になりましたよね。立川は昔から飛行場が造られたり、その後に米軍がやってきたりといろいろと大変な変化があったのですが、それを受け止め、吸収して自分のものにする力がある街だと感じますね。これだけ大きく住みやすくなっただけで、と。また、毎年里帰り公演をしているのですが、立川生まれというだけで歓迎してくれて、そのありがたみは落語家になってから特にひしひしと感じます。故郷をもっともっと大事にしたいなと思いますね。

未来の落語家を育成?

「落語キャラバン」で小学校を訪問

立川市地域文化振興財団が主催の「落語キャラバン」で、市立小学校を訪問。初めて落語に接する子どもたちに、落語を実演したり、子どもたちに高座を体験してもらったりと直接触れ合いました。



©(公財)立川市地域文化振興財団

立川市民から応援メッセージ!

「寸志さんの落語に魅了された10年。真打昇進は本当にうれしいです」

<さかえ会館管理運営委員会企画担当 飯田さん>

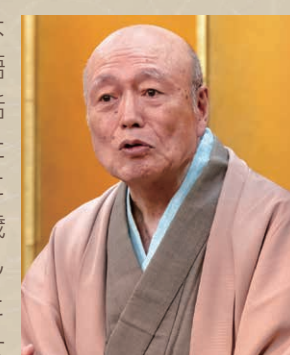
立川寸志さんのお母様がさかえ会館を利用していた縁で毎年寄席を開催してもらっています。今年で9回目になりました。第1回の開催で初めて寸志さんにお会いした最初の印象は、声がソフトで優しく気さくな方。高座が始まるとソフトな声はそのままに、演じている人物像がありありと想像できて、落語の面白さを感じました。寸志さんの落語に魅了された、あの日から10年がたちました。長年、寸志さんの真打昇進を心待ちにしていたので本当にうれしいです。今後のご活躍をお祈りしています!



師匠・立川談四樓さんが語る

「44歳の再挑戦。編集者から落語家へ、真打昇進の道」

当時編集者だった寸志とは本作りの話から、流れは落語談義に。落語研究会などの活動もしていたようで、いったんは落語家の夢を諦めた身にスイッチが入ったのか、44歳のときに弟子入りとなりました。本人には「20年遅いよ」と言ったのを覚えています。それからの精進は皆さまご存じのとおり、このたび真打昇進が内定しました。中年の星の再デビューです。ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。



師匠・立川談四樓

市はこれからも、立川ゆかりの人を応援していきます。



たてかわすんし 立川寸志 プロフィール

1967年東京都立川市生まれ。中学生時代に落語にはまり、寄席・落語会通いを始める。大学落研では会長を務めるが、卒業後は出版業界へ進み、数社の出版社勤務の間に、現在の師匠・立川談四樓と出会う。落語への思いが再燃し、2011年8月、44歳という記録的高齢で談四樓に入門。3年7か月の前座修業を終え、2015年3月、二ツ目昇進。2017年、渋谷らくご賞《たのしみな二ツ目賞》受賞。2024年、第24回さがみはら若手落語家選手権優勝。2025年9月、落語家として最高位の真打に内定。



其の五 師匠・立川談四樓さんとの出会いから入門まで

高校生のころから、落語家になりたいなあ、と思ってはいました。社会人として出版社に就職した後も、その思いはずっとあったのですが、40代になったときに、会社員としての自分の将来に虚しさを感じてしまっ。そんなときに作家と担当編集者の関係であった師匠・立川談四樓の落語を聞いて、改めて落語家になりたいという思いを強くもちました。迷ったり悩んだりすることもなく、申し訳ないのですが妻に相談もせず、44歳で入門をお願いしたというわけです。

